新見公立大学紀要　第38巻
pp. 45－50, 2017

論　稿

染色家岡林染里の哲学から学ぶ「育つこと・育てること」

吉村淳子[1)]*・三好年江[1)]・栗本一美[2)]

1）新見公立短期大学幼児教育学科　2）新見公立大学看護学科

(2017年11月15日受理)

本稿は、染色家岡林染里の「染め」における哲学を読み解きながら、保育・看護という2領域から「育つこと・育てること」について考察した。ここで、どちらの領域もともに共通することとして、育つものへの認識の重要性をあらためて確認することができた。岡林の世界は芸術（アート）の世界である。その世界は創造的世界であり、創造的世界とは、「対象に向き合う」という努力が無限に続く終わりなき世界である。保育および看護の世界も同様に、対象に対して「最善を尽くす」という瞬間瞬間を無限に続ける終わりなき世界であるといえよう。この連続性が創造的活動であり、これこそが岡林の世界であり、保育・看護ともに今考えなければならないことである。岡林の哲学は人が育つこと、育てることについて重要な示唆を与えてくれた。

（キーワード）創造的活動、育つこと、保育、看護

１．はじめに

筆者（吉村）は、岡林染里（以下岡林）という染色家と20数年の付き合いである。きっかけは、平成8年に本学に新設された「地域福祉学科」のカリキュラムの中のひとつであった「地域文化演習」という授業である。

「地域文化演習」という授業は、介護福祉士を養成する中で高齢者を理解するためには、まずその人の住んでいる地域を理解することが大事であるという考えで設定されたものである。その地域にある文化・歴史・生活などを知り、それを理解し、そこで暮らす人にとってそれが意味するものは何であるのか考えさせることが目的であった。この授業は、「草木染」「木工芸」「陶芸」「紙すき」「炭焼き」「神楽」という６種類を設定した。それぞれに、その道の第一人者と言われる職人の方に講師になっていただき、その伝統技術を学ぶことのみが目的ではなく、講師の語るその人の歴史や素材に向き合う姿勢、考え方などを通して、それらが人間にとってどのような意味を持つかについて考えさせることを重視した。

その中のひとつであった「草木染」は17年間にわたって授業を行っていただいたが、その後、カリキュラム変更等により現在はその授業はない。

当時、その授業の担当者であった筆者は、その17年に及ぶ授業の中で、彼が「染め」について学生に語った話は、どれも興味深く心に残る話であった。それは、「染め」の話にとどまらず人間としての生き方にまでも通じる話であった。さらに、学生を教育するという立場であった筆者にとっては、草木に向かう姿勢や考え方はまさに学生と向き合うその姿と考え方とが重なったのである。

今日、教育に関する書籍は数多く出版されているが、岡林の「染め」に対する考え方は、それに匹敵する重要な示唆を与えるものであった。草木という自然界にある植物を相手にし、さらに人間の力の及ばない「染め」という世界に身を置く彼の「染め」に対する姿勢は、「染めというのは、人間の力の及ばないもので相手に委ねなければならない世界である」というこの言葉に象徴される。

「染め」は、自分の考えている色に染めようと思っても、絶対に思い通りになるのものではない。「染める」ということは人為的なものではなく、自然に委ねなければならないものであり、委ねるためには、相手（布）を十分知っておかなければならないということである。これが「染め」に対する彼の哲学である。

科学や技術の進歩が著しい時代にありながら、人間が知り尽くすことができず、一つとして同じものが存在しないのが自然であり、自然界に生息する生物ではないだろうか。この世に生まれ、一つとして同じ環境の中で生きているものはないという点で、岡林が向き合っている草木も人間も同じ生物と捉えられるのではないだろうか。

この知り尽くすことのできない自然を知ろうとする、終わりなき努力の連続性が彼の持つ創造的世界である。そして、この創造的世界に生きる岡林の哲学は、人が育つこと、育てることについても重要な示唆を与えるものと考えられる。

本稿では、人にかかわる専門職を育てる立場にある保育と看護の２つの領域から、2017年6月9日に行われた、岡林染里が講師となった本学の公開講座「無駄の要」の内容に共鳴した2人（三好・栗本）に論考に加わってもらい、岡林

*連絡先：吉村淳子　新見公立短期大学幼児教育学科　718-8585　岡山県新見市西方1263-2

の哲学を通して、保育職と看護職における「育つこと・育てること」について考察する。

2．岡林染見と染めの哲学

ここで、岡林という染色家について簡単に紹介しておこう。

彼が草木染を始めるきっかけは、奈良の正倉院で1000年以上前の草木染の衣装を見たときである。1000年という時を経てもなお美しい色を保っている布に衝撃を受けたという。

その後、岡林は昭和58年にそれまで勤めていた会社を辞め、草木染を研究するために鈴鹿の山中に籠った。電気もガスもない生活の中で、ひたすら染めの研究に没頭し5年間を過ごした。その後、昭和63年に下山し、関西地域を中心に草木染の教室を開き、さらに、平成2年に奈良県室生に工房を築いて本格的な染色活動に入った。そして、平成5年にそれまでいた室生の水が汚れてきたこともあって、岡山県阿哲郡哲多町（現在の新見市哲多）に移り、現在の工房を開いた。

また、草木染の一方、柿渋という昔からある塗料で布を染めることを考えた。柿渋は染料ではなく塗料であるため、粒子は肌理が粗く布を通りぬけるためなかなか染まらなかったという。しかし、様々な研究を重ねた結果、柿渋で布を染めることに成功し現在に至っている。

彼が染めの話をするとき、口癖のように語ることは、草木染は「草木の命をいただく」という言葉である。そして、草木染をする際、「染める」ではなく「染まる」と言い、人間が染めるのではなく草木が染まるのであるという。人間は、その手助けをするに過ぎないと語る。主役は人間ではないのだ。

そして、一番大事なことは素材を大切にすることだという。素材とは布である。ゆっくり時間をかけて下準備をする。このとき決して無理はしない。寸胴という道具で布を煮ていくのであるが、沸騰したお湯にいきなり布を入れて煮るのではなく、前もって温湯に一晩浸して置き、その後ゆっくりと布を炊いていく。ときどきかき混ぜながら40～50分炊き、沸騰したら火を止め、また一晩かけてゆっくり冷ましていく。布を煮ているときは、やたらにかき混ぜたりふたを取ったりしない。とにかく、静かにゆっくりゆっくり作業を行う。そして、その後丁寧に水洗いする。

なぜこのようにするのかといえば、人間でもいきなり熱いお湯に入れたり、冷水に入れると皮膚に強い刺激を与えることになり、苦痛を感じるのと同じだという。「人間も布も同じ」と語る。

そして、水から沸騰してさらに冷めるまでの間じっと待つのである。時間にしておおよそ丸一日はかかる工程であるが、このとき片時も目を離さないで様子を見ているのかといえばそうではない。水が沸騰していくまでの音の変化と布が出す音の変化、湿度の変化、温度の変化、さらには匂いの変化など聴覚のみならず五感をすべて使って全身で感じながら作業をしている。この間、身体の全神経を集中させながらも実際には他の作業も同時に行っている。この身体の五感すべてで相手（布・水）の様子を感じ取っているということが重要である。ほとんどが相手に任せて待っているように見えるが、実は相手の様子や状態を観察しながら「染まる」ことへの環境調整をしているのである。したがって、どのような微妙な変化にも瞬時に対応でき、まさに必要なときに必要な手助けができるのである。

また、染料となる草木の葉や幹も同様である。同じ木から取っても、それを取る場所、時間、日の当たり具合や温度や湿度、さらには風の当たり方や日の当たり具合によって、色の出方はみな違う。同じ種類の木であっても、育った環境や置かれた環境によってそれぞれ違い、それは個性となる。それをきちんと見極めなければいい染めはできないと語る。

また、染めあがった布を干すとき天日に干すのであるが、雨が降ろうが風が吹こうが、例え鳥の糞が落ちたとしてもそれさえも受け入れて、何日も干すのである。そして、さらにその上に染めていく。そして天日で干す。ということを3年から5年繰り返してはじめて完成するのである。天候や外界の変化など自然の変化をそのまま受け入れる。大事に保存しながら染めていくのではなく、あえて厳しい自然環境にさらすのである。

このようにして染め上げられた布は、何年たっても色があせることなく布も柔らかくなり美しい布に仕上がっていく。すなわち、「命の輝きをいただき、草木の生命を長生きさせる」ということになるのだという。

3．保育における「『育つ』ことと『育てる』こと」を岡林哲学から考える

日本の幼児教育の父と呼ばれる倉橋は、名著「育ての心」[1]の中で、「自ら育つものを育てようとする心、それが育ての心である」という言葉を残している。「育つものと育てるものとが、互いの結びつきに於いて相楽しんでいる心」であり、「そこには何の強要もない。無理でもない。育つものの偉きな力を信頼し、敬重して、その発達の途に遭うて発達を遂げしめようとすること」と述べている。日本保育学会の創設者であり、初代会長を務めた倉橋のこの考えは、現在も尚、子どもに関わる多くの保育者に支持され、保育者の基本姿勢として大切に継承され続けている。また、発達の観点からも、子どもは受け身の存在ではなく、誕生後のかなり早い段階から能動的に環境に働きかけ、様々なことを自分から学ぶ学習者[2]と捉えられており、学術的にも科学的にも「子どもは自ら育つ存在である」というこ

とは、保育の関係者にとっては一般的なことして認識されている。そして、保育者は、子どもが育とうとしているところや内なる願いを、その姿や表情、言動等さまざまな様子から読みとっていかなければならない。そのことが、まずは最も重要な保育者の専門性として考えられている。つまり、「育つ」ことを見とる力である。その上で、子どもに必要と考えられる「援助」を、環境等を通して行うこと、つまり、「育てる」ことが「保育」だと考えられている。

保育の歴史の中で、上述した保育者の専門性が明確にされたのは、1990年に改訂された保育所保育指針[注1)]であった。それは、これまで使用されてきた「指導」という用語が、「援助」と言う用語に書き改められたことに見られる。1965年に刊行された保育のガイドライン「保育所保育指針」には、各年齢の子どもの発達する姿は「～できる」という表記で示されており、保育者の行為は「指導」という言葉で表現されていた。「各年齢の発達段階」を示していることや「指導」という言葉により、「できる」ことを求めた保育者の「させる」活動が保育の中心になっているのではないかという危惧からの改訂でもあった。つまり、子どもの実態を無視してあるべき姿に向けて「育てる」ことに力を注いでいく保育への警鐘でもあったと読み取れる。それ以降、「育てる」側の強い働きかけと誤解されやすい「指導」という用語は使用されず、現在まで「育つ」ものを「育てる」という意味の「援助」という言葉が使用され、保育者の関わりの基本的な考え方は変わっていない。

しかし、現状に目を向けると、子どもに「○○な力をつける」という「ねらい」を持ち、計画通りに保育を進めることに懸命な保育者は少なくないのではないだろうか。その保育者の傍らで、小さな願いや訴えを飲み込み、表現することを諦めてしまっている子どもがいるのではないだろうか。子どもを取り巻く社会や家庭環境の変化も大きく、その中で見られるのは、大人の指示通りに行動する子、常に確認を必要とする子、指示に従えず落ち着かない子、荒れた態度で友達に攻撃する子、表情が乏しく生気のない子たちである。

子どもが子どもであること、子どもが自分自身の時間をたっぷり楽しみ、自分のペースで育つことを許されていない現状があるように思えてならない。つまり、「育つこと」が軽視され、大人が必要と思うことを「育てる」に傾倒した保育があるのではないだろうか。

今回、染色家岡林の哲学に出会う機会を得て、保育における「育つこと・育てること」について改めて考えてみる必要性を感じた。

岡林が、染色の道に進むきっかけになったのは、奈良で出会った一枚の布だという[注2)]。岡林は、「草木染した布はすぐに色褪せてしまう」というのが世の常識であったにも関わらず、1000年以上経って色褪せていない一枚の布を見て衝撃を受けている。そして、「現代人は、自然のことを知らないのではないか」という問題意識を持つこととなった。つまり、「染めの材料となる草木の特性等を十分理解した上で染色を行っていないのではないか」という問いであった。そこで、岡林は、山中に篭もり、草木の声に耳を傾けながら、草木を知り、草木の求めていること、一つ一つの草木が持つ特性やそのものが持つ力に注目しながら、自然の中で生きる草木を対象とした染めの世界を追求している（吉村2001）[3)]。そのような中で生まれたのが、『染める』ということは人為的なものではなく、自然に委ねること」であり、「『染める』ではなく『染まる』を待つことである」という哲学だった（吉村2001）[4)]。「力を信じて、待ち、そのものが持つ本来の色が、一番良い状態で出てくる手伝いをしているだけ」という話は、まさに保育における子どもの「育つ力」を信じながら環境を整えたり、さりげなく手助けしたりする援助「育てること」と同じ考えである。

岡林は、「待つことが9割で草木が染まろうとする手助けは1割」と言う[注3)]。児童精神科医の佐々木[5)]は、「教育や育てることは、待つこと」であり「ひそかに最善を尽くしじっと待つこと」と述べている。両者の言葉から「待つ」ことは、染色においても保育においても重要であることが分かる。ここで、どのように「待つ」のかについて確認したい。岡林は、じっと耳を澄まし、観察しながら湯の状態を音で判断するなど、全身の感覚を使い、気配を感じながら少しの変化も見逃さないように見守っているのだ。そして、手助けが必要な「その瞬間」を見逃さず外さず対応する（吉村2001）[6)]と言う。これは、まさしく佐々木の「最善を尽くして」に相当する内容だと考える。手助けは、早すぎても遅すぎてもいけないし、多すぎても少なすぎてもいけない。相手の様子を全身で感じ取り観察しながら待つことにより、相手が求めている、相手にとって必要な援助が可能となるのだと考える。

さらに、岡林の「決して無理をしない」という考えにも注目したい。対象を見つめ続けてきた岡林は、対象に自分の心と体を一体化させているかのごとく、布や草木になりきって染色のプロセスを体験しているように思われた。「やたらにかき混ぜない」「急に熱湯に入れたり冷水にさらしたりことは植物にとって耐え難いこと」「ゆっくり、じっくり、十分時間をかけて」と、対象を全身で感じ取りながら、必要な手立てを行い、対象が環境に慣れていくのを待つとのことであった（吉村2001）[7)]。そして、岡林は、「私たちは、草木の命をいただいている」と語る。「命をいただいているということは、その命を長生きさせてあげなくてはならない」と言い「命は色のことである。色褪せない様、生涯、命を輝かせられるように手助けしなければならない」と付け加えた。一つ一つの草木の特性を知り、その草木の喜ぶ関わりをしたならば、草木は、生涯、命を輝かせるというのだ。まさに、岡林を染色の道に誘い入れた

1000年色褪せない染物のように、ということが常にあるのであろう。

「子どもが生涯にわたって生き生きと自分らしい人生を送ってほしい。命のある限り輝いていて欲しい」とは保育者の願いであり、そのような役割を担う専門家である。対象は異なるが、自然の中に生きるものと考えると、草木も子どもも同じ生き物だと考える。しかし、現実は、岡林が草木を思うほどに、謙虚な姿勢で尊厳を持って子どもを知ろうとしているだろうか。

岡林は、「草木は、そのものが育った土、気温、湿度、日当たり、風などそれを取り巻く環境により、同じ木の葉でも出てくる色は異なる。また、木の葉を摘むときの時期や時間によっても異なる」と述べている。子どもも同様で、生まれた時から持っている性質、地域環境、家庭環境、経験など一人として同じ者はいない。にもかかわらず、「自己主張が強くなる2歳の子ども」「落ち着かない子ども」「人見知りが強い子ども」など、ある枠組みや先入観で子どもを見ていないだろうか。一人一人の子どもが、どのような「育つ力」を見せていくのか、何を願っているのか、見ずして、聞かずして、待たずして、何の躊躇もなく、保育者が目指す子ども像に向けて働きかけていないだろうか。一人一人の子どもが生涯輝き続けていく力を身に付けていけるといえるのだろうか。「育つ」ものを「育てる」ということになっているのだろうか。「育てる」ことに偏っていないだろうか。

筆者（三好）は、今回、岡林の哲学を通して、改めて保育の本質について考えさせられた。同時に、子どもに関わる大人や保育者に多くの問いを投げかけられたようにも思えた。

岡林の「草木の中に入り、共に生活する中で草木を知る」「『染める』ではなく、『染まる』を待つこと」、「決して無理をせず、全身で相手を感じながら待つ」は、対象である草木が、知り尽くせないものであること、一つとして同じものはないことを熟知しているからこそ生まれた言葉であったと思う。

一人として同じ子どもはおらず、どんなに努力しても知り尽くせない。だからこそ、自分を潜らせるかのごとく理解しようとする最大限の努力を、無限に続けていく必要があるのではないだろうか。このことこそが、岡林の哲学の世界であり、保育の本質であり、普遍的な考えと言えるのではないだろうか。育てる側が肌身を持って感じる必要性のある課題である。

４．看護における「育つこと・育てること」を岡林哲学から考える

近年、社会の高齢化や医療環境の変化に伴い、急性期病院では在院日数の短縮化となり、医療依存度の高い患者も住み慣れた地域で生活することが求められ在宅医療へと流れが変化してきている。また、慢性疾患の時代になったことも加わり、治療が優先されていた医療モデルから生活モデルへ転換し、患者の生活の質の向上が問われるようになった。このような背景を受け、看護も患者の入院日数が短い中で、医師の診療の補助業務を行いながら、早期退院に向けて患者の今後の生活を見据えた看護が求められるようになった。患者の今後の生活を見据えた看護を行うためには、ますます患者の生き方や価値観などを踏まえ患者を全人的に捉えることが重要となる時代を迎えている。

Henderson. V[9]は、「看護とは、看護師の独自の機能は、健康・不健康を問わず、各個人を手助けすることにある。どんな点で援助するかというと、健康、健康の回復(あるいはまた平和な死への道）に役立つ諸活動。これらは、もしもその本人が必要なだけの強さと意志と知識とをかねそなえていれば、人の手を借りなくともやりとげられることかもしれないが、とにかくそうした諸活動の遂行にあたり各個人を援助する、それが看護師の仕事である。そして患者、あるいは健康な人の場合でも、その本人を助けて、できるだけ早く、自分で自分の始末を出来るようにするといった方法で、この活動を行うことである。」と述べている。このように看護は、看護の対象者の本来持っている力を引き出し、強めていくことができるようにサポートをする役割を担っている。

しかし、在院日数の短縮化により、看護業務の効率化や診療の補助が優先されてしまい、患者の本来持っている力を引き出す関わりにまで至っていない現状が垣間見られる。そして、患者の本来持っている力を引き出すことができていないまま患者は退院を迎えることとなる。また、患者は自宅退院することに対して困難感、不安を持っていても、医師や看護師に具体的に表現できず、困難感や不安を抱えたまま自宅に退院する患者も少なくない[10]現状も見られる。在院日数の短縮化に伴い、いまだ以前の考え方であった医療モデルでの対象理解に留まり、看護の基本となる対象理解にまで至っていないのではないかという自問に解答もなく苦しんでいた。そんな中、染作家の岡林と出会い、彼の哲学は、看護を考えるうえで重要な示唆を与えてくれているものと考えた。そこで、岡林の哲学から看護を考えるにあたり、「育つこと」を患者自身の本来持っている治癒力を引き出すこと、「育てること」をその患者の力が出せるように手助けすることと置き換えて考えることとした。

岡林の染めに対しての考え方のひとつに「同じ木から取っても、それを取る場所、時間、日の当たり具合など温度や湿度、また風の当たり方や日の当たり具合によって、色の出方はみな違う。それは個性となる。それをきちんと見極めなければいい染めはできない。また、木の葉を摘むときの時期や時間によっても異なる」と語っている。また「委

ねるためには、相手（布）を十分知っておかなければならない。」と語っている。岡林の染の世界と看護の世界では共通点がないように思っていたが、染めの世界の主役（主体）は染める側（人間）でなく、素材（布）である。看護の主役（主体）も、医療職ではなく患者である。どちらの世界も主体が対象であるという共通点が窺えた。そして、同じ木でも置かれた場所によって色の出具合が異なり、それがその対象の個性であるように、看護でも同じ疾患の患者だからと言って同じ症状が出るわけではない。その患者の抱えている身体的状況はもちろん、社会的状況や家族の状況、精神的状況など、その人の置かれている環境の違いによって症状の出方は異なる。たとえ、同じ疾患で痛みという同じ症状が出たとしても患者の精神的状況によってその痛みの強弱は異なる。精神的不安の強弱によって、痛みの強弱に影響を与える。また、同じ疾患でも患者のライフサイクルによっても症状の出方や治療の仕方が異なる。よって、患者を捉える際にその患者の身体的・社会的・精神的・環境的な4側面を把握し、患者を総合的に捉えアセスメントをする。その際、看護提供者側の価値観で判断し患者を観てしまうと患者と看護師間に信頼関係は形成されず、治療や看護自体も拒否されてしまう。また、本来患者が持っている力も見失ってしまう可能性もある。そこで、岡林が「素材を大切にする」と語っているように、あくまでも患者そのものを捉えることが大切となる。患者そのものを捉えることによって、患者の持っている本来の力を見極め、患者に沿った個別性のある看護を提供することにつながる。看護は、日常生活の支援と治療とを両立させ融合させた個別性のある看護を提供しなければならない。よって、看護者には、対象の本質をしっかり見極める目を確かなものにしておくことが求められるのである。

さらに、岡林は「待つことが９割で草木が染まろうとする手助けは1割」と語っている。また、じっと耳を澄まし、観察しながら湯の状態を音で判断するなど、全身の感覚を使い、気配を感じながら少しの変化も見逃さないように見守っているのだ。そして、手助けが必要な「その瞬間」を見逃さず外さず対応する（吉村2001）[11]とも語っている。しかし、在宅医療の流れが進む中、在宅療養者によっては、一つのことをするにもかなりの時間を要するため、家族介護者が手助けをしてしまうことがある。手助けをしてしまうことによって、患者は楽になり、家族介護者も介護時間の短縮につながるので互いに良いように思われる。しかし、それは患者の自立を奪うことにつながっている。ここで、いかに岡林が語る「待つ」ことが重要であるか思い知らされる。「待つ」ことは、手助けが必要な「その瞬間」を見逃さず外さず対応するための時間に過ぎない。そして、その患者にとっての「その瞬間」に必要な援助のみを手助けすることが、患者の本来持っている力を引き出し、強めていくことになるのである。これが「育つ」こと「育てること」になるのではないだろうか。

岡林は、染めの工程の中で、布を40～50分窯で炊き、ゆっくり冷ます過程を行う。じっと耳を澄まし、観察しながら湯の状態を音で判断するなど、全身の感覚を使い、気配を感じながら少しの変化も見逃さないように見守っているのだ。岡林は、目に見えない寸胴の中の状態を、五感をすべて使い全身で観察している。この姿勢は、看護において最も重要な姿勢である。

看護の対象者は、言語でコミュニケーションが取れる患者ばかりではない。非言語的コミュニケーションでの訴えが主となる赤ちゃんや障碍を持った患者も対象である。非言語的コミュニケーションの患者の訴えを聞くためには、看護職は自分の五感をフルに活用し、患者の些細な目の動きや口元の動き、あるいは身体的変化など患者からの発信をキャッチすることが重要である。そして、対象者が求めていることを全身で感じ、観察しながら対象者に必要な手助けを必要な瞬間(トキ）に行っていくことが大切である。岡林のように全身で観察できる感性を持つこと。これは看護者が自らに課さなければならない課題ではないだろうか。

岡林の染の哲学から看護における「育つこと・育てること」を考えてきた。岡林の染に対する考え方は、看護の対象理解をする上でも大切な視点であることが理解できたように思う。

これから、ますます在宅医療へと流れが加速していく中、看護における「育つ」ことと「育てること」とは、看護の対象者の持っている本質を見極め、対象者の価値観や人生観を大切にし、治療と日常生活を融合させながら対象者がそれまで生きてきた軌跡を継続していくことができるようにサポートをしていくことである。そのためには、対象者の力が引き出されていくよう、対象者が自身の強みを生かしていくことができるように手助けをしていくことが必要だと考える。

５．まとめ

岡林の哲学という視点から、保育・看護というそれぞれの立場で、「育つこと・育てること」について述べてきた。

どちらの領域ともに、共通することとして育つものへの認識の重要性をあらためて確認することができた。

岡林の世界は芸術（アート）の世界である。その世界は創造的世界であり、創造的世界とは、「対象に向き合う」という努力が無限に続く終わりなき世界である。

子どもと保育者、患者と看護の世界も同様に「最善を尽くす」という行為を無限に続ける終わりなき世界であるといえよう。最善とは、その時その時にできる最大の努力であり、終わりはなく、無限に続く創造への努力である。それは、まさに創造的世界である。

かつて、筆者（吉村）は、本学の初代看護学科長から、「看護はアートである」と聞いたことがある。その意味することはまさに、その時その時に、対象者に対して最善を尽くすという瞬間が無限に続くことであり、患者と看る者で創造する世界のことであろう。また、子どもと保育者においても同様に、対象に対してその最善を尽くすという行為を無限に続けることであり、この連続性が創造的活動であり、これこそが岡林の世界であり、本稿の筆者らが心動かされた認識である。

＜注＞

注１）1965年,保育所保育指針は,厚生省（現、厚生労働省）が保育所保育の理念や保育内容,保育方法などを示し,保育所における保育の向上、充実を図るためにガイドラインとして示したものである。その後、2008年には,告示化され,国が示すガイドラインから法的拘束力を持ち最低基準として規範性を有するものとなった[8]。

注２）岡林染里・吉村淳子「対談『無駄の要』」2017年度新見公立大学公開講座．2017.

注３）注２）に同じ

文献

１）津守真・森上史朗「倉橋惣三著『育ての心』上」フレーベル館，3，2008

２）待井和江・福岡貞子「乳児保育」ミネルヴァ書房，17-22，2015

３）吉村淳子「染色家岡林染里の音の世界」新見公立短期大学紀要22，11-15，2001

４）前掲３）

５）佐々木正美「子どもへのまなざし」福音館，64，2013

６）前掲３）

７）前掲３）

８）増田まゆみ「保育所保育指針」森上史朗・柏女霊峰『保育用語辞典』ミネルヴァ書房，64，2015

９）Henderson．Ｖ：看護の基本となるもの,11,日本看護協会出版会,

10）小林朱美・井上千恵子・佐々木幸子・他２名：自宅への退院支援に関する研究―患者が感じている困難や不安と看護師の認識の比較―，木村看護教育財団，1－29,2008.

11）前掲３）